

地方経済団体による地域偉人顕彰活動 —松山商工会議所の事例

Enlightenment Activities of Local Entrepreneurs by Local Economic Organizations
— The Case of Matsuyama Chamber of Commerce and Industry

山口 由 等*
Yoshito YAMAGUCHI

要 旨

文学分野の歴史的人物の顕彰が中心の愛媛県で、近年、松山商工会議所が産業分野の人物の調査研究、顕彰活動に取り組んでいる。その活動は、会議所の青年部が「坊っちゃん列車生みの親」・小林信近をアントレプレナーとして評価する動きから始まった。松山市内に関係企業によって小林の銅像が建てられ、没後100周年を記念した行事の開催や新聞広告などの結果、関連する書籍の出版や雑誌での紹介などに展開した。同会議所は、顕彰・啓発活動の基礎とするための学術調査を持続化し、産業分野や街づくりの偉人顕彰活動を発展させるために研究会を設置した。研究会は毎年一人ずつ調査を重ねており、その活動記録として足立重信、森盲天外の調査状況、およびこれらの活動の成果である偉人の普及啓発の状況を確認する。

Abstract

In Ehime Prefecture, the recognition of historical humans was mainly in the field of literature. However, recently the Matsuyama Chamber of Commerce and Industry has been working on research and recognition of individuals who have contributed to industrial development. Affiliated companies built bronze statues of Kobayashi Nobuchika, who established the train company in Matsuyama City, holding events commemorating the 100th anniversary of the death, and advertising in newspapers. These led to the publication of related books and introductions in magazines. And further, the chamber has set up a study group to sustain academic research as a basis for honoring and enlightenment activities, and developing activities to recognize great people in industrial fields.

キーワード：松山商工会議所、アントレプレナー、顕彰、偉人研究会、小林信近、足立重信、森盲天外

Keywords：Matsuyama Chamber of Commerce, entrepreneur, enlightenment of persons, entrepreneurship study group, Kobayashi Nobuchika, Adachi Shigenobu, Mori Motengai

1. はじめに

2000年代半ばから後半にかけて、日本では

*愛媛大学 社会共創学部 教授
Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University, Professor

近代化遺産・産業遺産（industrial heritage）の認知度がにわかに高まった。近代化遺産は1990年代から建築史・建設史関係者を中心に調査、保存、活用の活動が進められ、文部省（当時）主導の各県教育委員会による調査や、通産省（当時）による産業遺産のリスト作りと産業遺

産認定の活動など、20年以上にわたって多様な事業が行われていたが、必ずしも一般には知られていなかった。しかし、2000年代に入るとほぼ毎年のように日本の物件が世界遺産に認定され、世界遺産検定も実施されるなど歴史遺産への関心に繋がった。また、石見銀山などでの観光客の増加が「世界遺産効果」として注目されるようになり、各地で近代建築や産業遺産、ひいては地域の近代史への関心が高まっている。

こうした中で、愛媛県の松山商工会議所は、数年前から地域開発や産業発展に貢献した人物の発掘・顕彰の活動に取り組んでいる。その発端となったのは、小林信近という、明治期の松山で活躍した経営者・政治家を再評価する活動である。松山は、2001年から伊予鉄道が「坊っちゃん列車」のレプリカを市内で運行するなど、鉄道遺産については早くから観光コンテンツの整備が行われてきた地域である。「坊っちゃん列車」とは、明治から昭和にかけて伊予鉄道が運行したドイツ製の小型機関車で、松山をモデルにしているといわれる夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場することから名付けられた通称である。2016年には、伊予鉄道の創業者である小林信近の銅像が建立され、さらにその真正面にある伊予鉄道本社の一階に「坊っちゃん列車ミュージアム」が開館するなど、近代化産業遺産を評価する機運は、松山でも近年ますます高まってきている。

「坊っちゃん列車産みの親」・小林信近は鉄道、電力、銀行、築港その他多岐に亘る事業を興し、伝記執筆も何度か行われたものの、近年は知名度がほとんど無くなっていった。その再評価の中心となったのが松山商工会議所である。小林は松山商工会議所の初代会頭でもあり、その再評価から始まった商工会議所の偉人顕彰事業は、持続化と拡大を目指して現在も続けられている。本稿は、こうした松山商工会議所の活動を、近代史や産業遺産の社会的関心が地方でも高まっていることを示す事例として位置づ

け、産業偉人の資料調査や、その成果として実施・公表された事業・成果を紹介する。

2. 松山商工会議所の偉人顕彰活動の発足

松山商工会議所の偉人顕彰活動は、青年部（松山 YEG : young entrepreneur group）が地域のアントレプレナーとして小林信近に注目し、2015年にミュージカルを上演したことから始まった。これを契機に、商工会議所内で「忘れられた偉人」であった小林信近の再評価の気運が高まり、会議所全体としても顕彰の取組みをすることとなり、伝記等の刊行・公表資料の収集を進めたが、さらなる資料発掘や顕彰事業のために有識者（専門研究者）に調査を依頼することとし、過去の顕彰や伝記の整理、および一次資料の調査を愛媛大学社会共創学部の山口由等（日本経済史専攻）に委嘱した。

顕彰事業の中心として据えられたのが銅像の建設である。松山商工会議所を中心に関係会社や松山市などの協力を得て、2016年10月に伊予鉄道・松山市駅前の「坊っちゃん広場」の一角に銅像が建立された。また、12月には伊予鉄道が本社ビル一階に「坊っちゃん列車ミュージアム」を開館し、常設展示の中に創業者として小林を紹介するパネルを掲げている。一方、先行研究整理・史料調査の成果は、4月に会議所常議員会後にひとまず中間報告が行われた後、10月の銅像除幕式と11月の会議所総会で小林の功績が紹介され、さらに調査に基づいて銅像脇の碑文が作成された。最終的な調査成果は、会議所主催の「松山観光文化コンシェルジュ講座 ふるさとふれあい塾」の一部として12月に「四国の鉄道文化と小林信近」と題する講義が行われた他、『松山商工会議所所報』No. 700 記念号に「松山の繁栄を築いたふるさとの偉人 初代会頭 小林信近」が掲載された。

その後、2018年が小林の没後100年にあたることから、その記念事業が計画された。青年

部が中心となって子供向けのイベントを開催することとなり、その一環として小林信近の足跡を辿る市内ウォークラリーも実施されることになった。命日となる9月21日に、銅像のある「坊っちゃん広場」で記念式典が開かれた後、いよてつ高島屋ホールで記念シンポジウム「まつやま未来創造サミット」(商工会議所・同青年部・松山青年会議所・松山法人会青年部主催)を実施した。サミットには会議所役員・議員108名が出席し、山口による基調講演の後、小林が創業した企業のトップと主催青年3団体によるパネルディスカッションが行われた。また、『愛媛新聞』2018年9月21日号に、会議所および加盟企業による没後100年を記念した小林信近の広告が掲載され、普及啓発が図られている。

記念式典とシンポジウムに続いて、9月24日には会議所青年部を中心に「小林信近翁没後100年事業・スマコレランドまつやま2018」が松山城堀之内の広場で実施された。会場で行われた子供向けのテーマパーク的なイベントは小林と直接関係するものではないが、会場を出発点・ゴールとするスタンプラリーは、周辺の小林と縁のある施設を回ってクイズに解答することでその足跡を学び、スタンプを完成させると会場で景品の抽選を行うものであった。スタンプポイントは、小林が創業に関わった愛媛新聞社、四国電力松山支店、第五十二銀行(現・伊予銀行)跡、伊予鉄道本社(坊っちゃん列車ミュージアム)ほか1カ所であり、商工会議所職員と愛媛大学社会共創学部学生が協働で運営に当たった。

3. 偉人の発掘・研究と顕彰活動

松山商工会議所は、小林信近について行われた以上のような顕彰事業の拡大・持続を図り、2017年度から会議所内に「眠れる偉人を未来につなぐ研究会」(以下、「偉人研究会」と記す)を組織した。委員のうち1名は学識経験者とし

て、その他は会議所常議員から8名が選出された。第1回会合は2017年7月に開かれ、学識経験者枠の山口由等(愛媛大学)が座長を務めることとなった。また、松山地域における偉人の調査研究・普及啓発、まちづくりや観光振興の活性化につなげる活動を行うことが規約として了承された。これを受けて、初年度の2017年度の対象となる偉人を2017年内に検討した結果、松山を築城した戦国大名・加藤嘉明の家臣である足立重信が選定された。研究会はその後、森盲天外(2018年度)、加藤拓川(2019年度)を選定して、「ふるさとふれあい塾」での講演への反映、『会議所所報』での概要紹介を引き続き行っている。

3.1 第1年度(2017年)の偉人研究会

偉人の選定は、初年度はまず顕彰活動の対象となる候補の推薦を各委員に募り、その結果9名の偉人が第1次候補となった。9名について比較資料が作成され、第1回委員会では推薦者からの説明を加えて、第2次候補として足立重信、森盲天外、村上霽月^{せいげつ}の3名が絞り込まれた。これら3名について補足調査を行い作成した資料を第2回委員会で検討し、投票で第1位となった足立重信の顕彰を行うことが決定された。愛媛県人物博物館の展示では、重信川や石手川の付け替え・改修および松山城築城で普請奉行を務めた足立重信は、治水・土木事業で松山の礎を築いた開拓者であり、開墾奨励や年貢率の設定など松山藩初期の財政基盤の整備、充実に手腕を発揮した人物として紹介されている。ただし、築城普請奉行としての活動の実像はほとんど不明であり、重信川に名が冠されていることもあって一般には専ら河川事業に関連して知られている程度である。大正期には松山城築城300年を機に伊予史談会による資料調査が行われており、また、1974年にも没後「350年祭」が実施されたが、その後約半世紀近くの間、とくにまとまった活動は行われていない。

偉人研究会は、愛媛県立図書館、国会図書館

デジタルコレクションで予備調査を行ったが、前近代の人物ということで新たな一次資料の発掘は不可能であった。しかし、二次史料である加藤家の家譜の翻刻から足立重信に関する情報を抽出して整理した他、大正期の郷土史家による伝記や収集資料の記録が残されており、これを再調査した。

松山城築城300年を機に行われた加藤嘉明・足立重信両人の研究・顕彰は、1914年に加藤が従三位、1919年に足立が正五位に追贈されるという成果を残している。とくに足立重信については彰功会が設立され、1925年に墓所再建と「頌功之碑」建立が行われた。また、当時の調査の成果は伊予史談会(1930)、西園寺(1917)などとして刊行された他、伊予史談会の中心人物である西園寺源透による収集(筆写)資料の綴りが「加藤嘉明文書」として県立図書館に所蔵され、その複写ファイルを閲覧することができる。また、1975年の没後350年祭事業では、『伊予史談』特集号や松山市による記念行事などが行われた。さらに、大正期の調査が1980年代の『愛媛県史』、『松山市史』などの自治体史編纂に生かされ、とくに「加藤家水口文書」が『松山市史』資料編に翻刻されたことで、初期の加藤家に関する資料を一般読者が確認できるようになった。

一方、滋賀県甲賀市では、民間に保存されてきた加藤家関係の文書が甲賀市に寄贈され、甲賀市教育委員会がこれを整理して甲賀市教育委員会(2010)として調査報告・目録を刊行した。また、家臣の子孫旧蔵文書類が調査され、甲賀市教育委員会(2011)などが翻刻されている。加藤家が松山から会津、石見、さらに改易を経て水口へと転封を重ねたこともあり、松山時代の史料は僅かであるが、築城初期の松山城天守台の図面によって、加藤家時代の天守は存在しなかったとの説が有力となっている。

さらに、近年、愛媛県内で加藤家や足立重信に関する史料の発掘が行われ、新しい事実が明らかになってきている。西条市大頭の旧家に伝

わっていた「佐伯文書」が小松温芳図書館に寄贈され、大正期の調査で出版された伊予史談会(1930)に存在が記録されていた足立重信の書簡・全20通が2017年に復刻され、愛媛県歴史文化博物館の展示にも利用された。これにより、足立重信が陪臣や在来の有力者などを通じて、地方の年貢や争論など行政に腕を揮っていたことが明確となり、治水や築城に止まらない足立重信の実像が明らかとなっている。

以上のような研究状況の確認をふまえて、偉人研究会は観光振興などに役立つ歴史遺産の確認・整理を試み、築城初期の松山城石垣、石手川の付け替えが行われた岩堰の工事現場の痕跡、足立重信時代の堰を江戸時代中期に改修した石垣造の堰(曲げ出し)の保存状況などを確認した。

3.2 第2年度(2018年)の偉人研究会

前年度の成果を基に、『松山商工会議所所報』(No.717)における足立重信の概要紹介や、2018年度「ふるさとふれあい塾」において松山の開発に貢献した人物として小林信近と足立重信を並べて紹介するなどの活動を行った。

一方、第2年度の調査活動の対象人物については、前年の2次審査まで残った村上霽月・森盲天外に1名を加えて最終選考することとした。その候補として、これも前年から継続する6名の他に追加候補の推薦を改めて各委員に依頼したところ、松平定直(伊予松平家第4代藩主)、安倍能成(元文部大臣)が推薦された。これらの候補を2回の委員会で検討した結果、森盲天外を第2年度に調査・顕彰の対象として選定し、これまでと同様に史料調査や普及活動が行われた。

森盲天外(本名・恒太郎)は、壮年期にその号の通り失明しながらも、村長として地元の余土村を全国的に評価される農村として指導したり、失明前後の人生を綴った森(1908)がベストセラーとなったりしたことで、当時から全国的な知名度があった。現代でも、松山では「天

下の模範村余土村を作った」,「地方自治の先覚者」などとされており, 従来から顕彰活動が行われていた人物である。愛媛県人物博物館における展示では,「県議会議員として活躍後, 失明。模範村の盲目村長として名をあげた。晩年に青年教育のために道後に〈天心園〉を開き, 道後湯之町町長を務めた。子規から〈天外〉の号を受け, 自らは〈盲天外〉と称した。」と紹介され, 主に農村自治における功績が評価されてきた。村長時代に進めた殖産興業事業をまとめた『村是』は内国勸業博覧会で一等賞牌を受賞した他, 小作保護積立米寄付を募って地主を行脚したり, 小作人に対する肥料貸付事業を創設するなど, 村内の地主・小作人関係の改善に努めたことが知られている。

明治維新直前に余戸村^{よご}で庄屋の跡継ぎとして生まれた恒太郎(後の盲天外)は, 松山中学校で慶應義塾出身の草間時福^{ときよし}から民権思想の薫陶を受け, さらに東京で明六社^{めいろく}の中村敬宇(正直)の下で学ぶなど, 開明的な教育を受けた。郷里に戻ると, 仲間と農村の改良などを論じる傍ら水害からの復興や鉄道など近代的会社の設立に係わり, さらに政治家として活動するようになる。民権政党である四国改進黨の設立に加わり, とくにその機関紙である予讃新報－愛媛新報の編集を行うなど言論で活躍し, 県会議員にも当選している。しかし, 30歳を目前に政界を引退して実業界に転じた直後, 両眼を失明して郷里に逼塞するが, 生命を生かす一粒の米の尊さへの気付きをきっかけに再起を決意し, その直後に村人に請われて余土村長に就任する。開明的な地主(いわゆる老農)とも協力して政府が推奨していた殖産興業政策を発展させて, 大掛かりな村内の実態調査を毎年実施して村の問題点を村民に明示し, 共同購入, 小作人保護, 耕地整理, 副業奨励などの方針を掲げ, 農業経営の改善や自治の近代化を進めた。また, 自ら地主の家々を回って募金と説得を行い, 肥料基金の創設と運用を通じた地主と小作人双方の自覚向上と融和を図った。村内調査と村政の記録

を編集した「余土村是」は第5回内国勸業博覧会に出品されて1等賞牌を受賞し, 余土村は日露戦争後の地方改良運動で「模範村」とされ, 全国的にその名を知られるに至った。

森盲天外に関する一次資料としては, 戦前期の公文書がいくつか確認できる。国立公文書館に所蔵されている「森恒太郎外1名表彰の儀に付上奏の件」(1923)は, 皇太子(後の昭和天皇)成婚記念の表彰の推薦のための書類である。新たな事実の発見がみられるというわけでは無いが, 存命中の公的な功績, 学歴・職歴の一次資料であり, その内容の信頼度は高いといえよう。また, 地方史団体である愛媛近代史文庫の刊行物でも森盲天外は何度か取り上げられており, 機関誌『愛媛近代史研究』では汲田克夫が2回ほど執筆している。まず, 生誕100年という趣旨が述べられている汲田(1964)では, 盲天外の著作からその生涯が論じられると共に, 石田伝吉作成とされる年表が掲載されている。篠崎(1983)は盲天外の天皇関係の言説をより詳細に紹介・考察し, 「天皇崇拝がすべての論理に優越して先行する」ことについて「論理の飛躍ではなく, 没論理」と厳しい評価を下している。汲田(1965)は, 盲天外の息子夫婦のインタビュー内容をまとめたもので, わずか3頁ではあるが, とりわけ晩年に運営した青年修養のための団体・施設である天心園や, 家族による旅館経営などの様子を知ることができる。なお, この息子夫婦のより詳細な聞き取り記録が森(1977)の付録や森(1985)に掲載されており, 家族の眼から見た森盲天外の動静が遺されている。森盲天外の晩年の著作は説教色が強く取っ付きにくい印象があるが, 存命の孫の森謙介氏によると, 当時の天心園には全国から盛んに見学・研修者が来ていたとのことであり,¹⁾ 昭和初期の国粹主義的な時世を反映してのことかと考えられる。

1) 2019年1月9日に森謙介氏の自宅で実施したインタビューによる。

森盲天外の出身地・松山市余土でも、顕彰の機運は近年にわかに高まっている。2017年の愛媛国体に合わせた松山市市坪（旧余土村内）の松山中央公園の道路清掃活動が県から評価され、この道路が2016年9月に「盲天外通り」と命名された。さらに、2018年の盲天外の命日である4月7日には、余土公民館で「一粒米の会」が設立されている。同会は同年中に3回の「ふるさと余土学」などを開き、2019年4月の総会では「第6回・森盲天外を偲ぶ会」として森二郎が「〈四つの石碑〉と〈新渡戸稲造の『一粒米』序文〉から森盲天外を偲ぶ」の演題で講話し、続いて第1年度の活動報告などが審議された。

偉人研究会は、以上のような盲天外の事蹟の再整理と評価、史料の確認・発掘と地元における顕彰活動の聞き取り、参加などを行いつつ、次年度の『会議所報』（No. 728）に森盲天外の紹介を掲載した。また、前年に引き続き9月に松山市堀之内で開催された「スマコレランドまつやま」のイベントの一つとして、偉人ウォークラリーを商工会議所事務局と愛媛大学社会共創学部学生が協働で実施した。堀之内の会場をスタート・ゴールとするのは前年と同様であったが、スタンプポイントは前年よりも近距離に配置し、小林信近・足立重信・森盲天外の3人について学ぶクイズに答えるものとした。また、ポイントの一つとしたアーバンデザインセンター（花園町通り）の一角に、これら3名の業績に沿って松山市の開発・発展を学ぶコーナーを設けることで、より啓発・発信の内容を充実させた。

4. おわりに

愛媛県には、四国88カ所霊場遍路、内子・大洲の歴史的街並み、しまなみ海道とサイクリング、別子銅山産業遺産など独特の文化的観光コンテンツがある。一方、松山市内では道後温泉と松山城が2大観光地とされ、これをより展

開するために「いで湯と文学のまち」をキャッチフレーズとして、松山市営の子規記念博物館および坂の上の雲ミュージアムが建設・運営されている。こうした状況の下、地域内外で知られている松山の偉人は、俳句や小説の作者または登場人物に偏り、経済人や地域開発に貢献した人物は埋もれているケースが多い。例えば、村上霽月は生誕100年祭でもっぱら俳句での業績が顕彰されたが、農協中央会の入口に銅像があるように戦前の農業金融や産業組合の中心人物でもあった。明治から大正期にかけて約20年間、伊予鉄道の社長を務め、また政党政治家でもあった井上要や、市内最大の資産家で松山紡績社長や商工会議所会頭、伊予銀行頭取を務めた仲田家を知っている市民も少ないだろう。こうした状況で、商工会議所が経済団体としての視点から地域史や偉人の発掘・顕彰を行うことは、松山ではとくに意味がある。JRを別とすれば私鉄で国内二番目、社名を残す存続会社としては最古の歴史を持つ伊予鉄道の鉄道遺産などは、観光コンテンツ化の可能性をおおいに持っている。地域の都市化・近代化に貢献したその他の経済人を今後いっそうアピールしていくべきであるが、現実には、戦前の財界、主な資産家・経営者、商店街などの経済史研究がかなり遅れていることが関心を低くし、そのことが史料や遺産を埋もれさせて研究が停滞するという状態にある。これは、単なる未知(unknown)というよりは、低認知(under-known)とでもいべき悪循環であろう。地域としては平均的な経済水準、産業発展だったとしても、人物に焦点を当てれば企業家精神・アントレプレナーシップを持った人物は必ずいるということ、松山の事例は示唆している。民学協働で調査・研究と積極的な発信を合わせて持続的にを行い、上記の悪循環から脱却に繋げることができるかどうか、今後の焦点である。

参考文献

- 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 近世 上』愛媛県, 1986
- 足立重信公350年祭実行委員会編『足立重信と松山』松山市役所, 1974
- 池内清間『愛媛県温泉郡余土村是調査資料』余土村, 1903
- 伊予史談会編『加藤嘉明公』松山市, 1930
- 近代史文庫編『郷土に生きた人びと－愛媛県－』静山社, 1983
- 汲田克夫「森盲天外の生涯」・「森盲天外恒太郎年譜」『愛媛近代史研究』第6号, 愛媛近代史文庫, 1964
- 汲田克夫「森盲天外事蹟聞書」『愛媛近代史研究』第8号, 愛媛近代史文庫, 1965
- 甲賀市教育委員会『水口藩加藤家文書調査報告書』甲賀市, 2010
- 甲賀市教育委員会『近江国水口藩加藤家分限帳』甲賀市, 2011
- 西園寺源透「足立重信伝」『伊予史談』10号, 伊予史談会, 1917
- 西園寺源透「加藤文書」愛媛県立図書館所蔵
- 篠崎勝「住民自治思想・水平思想・教育思想と天皇崇拜」愛媛近代史文庫編『愛媛資本主義社会史 第3巻』愛媛近代史文庫, 1983
- 霽月村上半太郎生誕百年祭実行委員会『霽月村上半太郎 生誕百年祭記録』1971
- 玉井豊『愛媛篤農伝』愛農刊行会, 1971
- 松山市史料集編集委員会『松山市史料集 第2巻』松山市役所, 1987
- 森カ子^{かお}『冬のかたみ』森カ子, 1985
- 森恒太郎『一粒米』博文館, 1908
- 森恒太郎『一粒米（増補版）』（復刻）青葉図書, 1977
- 山口由等「地域レジリエンスと四国の鉄道文化・産業遺産」『国際比較研究』愛媛大学国際比較研究会, 2017
- 山口由等「〈坊ちゃん列車〉と小林信近」『愛媛近代史研究』愛媛近代史文庫, 2017
- 山口由等「鉄道黎明期の愛媛県と鉄道資料」『愛媛近代史研究』愛媛近代史文庫, 2018
- 山口由等「〈松山の生みの親〉足立重信の史料と実像：偉人顕彰からシビックプライドに向けて」『国際比較研究』愛媛大学国際比較研究会, 2019
- 渡辺茂雄『四国開発の先覚者とその偉業』四国電力, 1964

付録 松山商工会議所等の偉人顕彰事業一覧 (2016~2019)

1. 松山商工会議所事業

① 行事

年月日	名 称	主 催 者
2016/10/28	小林信近翁顕彰碑建立記念式典 (松山市駅前 坊っちゃん広場)	松山商工会議所
2018/9/21	小林信近翁没後100年記念式典 (松山市駅前 坊っちゃん広場)	松山商工会議所
2018/9/21	シンポジウム「まつやま未来創造サミット」 (いよてつ高島屋ホール)	松山商工会議所・同青年部
2018/9/24	小林信近翁没後100年記念事業「スマコレランドまつやま2018」 (城山公園・市内各所)	松山商工会議所・同青年部
2019/9/23	小林信近翁顕彰事業「スマコレランドまつやま2019」(城山公園・市内各所)	松山商工会議所・同青年部

② 講座

年月日	名 称	実施団体
2017/10/27	市民公開講座「ふるさとふれあい塾」(2017年度) (松山大学) 講師:愛媛大学・山口由等	松山商工会議所・松山市・松山大学
2018/12/3	市民公開講座「ふるさとふれあい塾」(2018年度) (松山大学) 講師:愛媛大学・山口由等	松山商工会議所・松山市・松山大学
2019/12/23	市民公開講座「ふるさとふれあい塾」(2019年度) (松山大学) 講師:愛媛大学・山口由等	松山商工会議所・松山市・松山大学

③ 広報

年月日	掲 載 誌	概 要
2016/10	松山商工会議所『所報』(第700記念号)	松山商工会議所の歴史特集, 初代会頭として小林信近を紹介
2016/11	松山商工会議所『所報』(第701号)	松山市駅前坊っちゃん広場に「小林信近翁顕彰碑」が完成
2018/5	松山商工会議所『所報』(第717号)	顕彰すべき偉人として選定された足立重信公を紹介
2018/9/22	松山商工会議所 NEWS (愛媛新聞折込 広告)	小林信近翁没後100年記念事業の告知
2018/10	松山商工会議所『所報』(第722号)	小林信近翁の没後100年記念式典, シンポジウム, 市民向けイベントの実施を報告
2019/5	松山商工会議所『所報』(第728号)	顕彰すべき偉人として選定された森盲天外を紹介
2019/10	松山商工会議所『所報』(第733号)	市民向けイベント「スマコレランドまつやま」, 松山の偉人ゆかりの各所を巡るウォークラリー等のイベントの実施を報告

2. その他団体等

① 展示

年月日	名称・内容等	場所、実施団体
2019/4～6	明治150年特別展「明治まつやま偉人伝」	松山市立子規記念博物館、同
2018/7～9	小林信近と松山の産業遺産	愛媛大学図書館、愛媛大学山口由等ゼミ
2018/9/1	伊予鉄道の創始者・小林信近が手掛けた五大事業	坊っちゃん列車ミュージアム、(株)伊予鉄グループ
2018/5/23	まちづくりフォーラム「第14回お城下大学 松山城下図 屏風からみえる松山のまちづくり」 講師：愛媛県歴史文化博物館・井上淳	坂の上の雲ミュージアム、(一社)お城下 松山
2018/7/25	まちづくりフォーラム「第15回お城下大学 重信川(伊 予川)物語～足立重信の治水事業と現在の防災～」 講師：国土交通省四国地方整備局松山河川国道事務所調査 第一課長・山崎元司	坂の上の雲ミュージアム、(一社)お城下 松山
2019/10/22	バスで歩くお城下大学「重信川歴史深訪「重信公と霞堤と 現代の防災を知る」 講師：国土交通省四国地方整備局松山河川国道事務所工務 第一課長・山崎元司	坊っちゃん広場～重信川上流、(一社)お 城下松山

② 刊行物

年月日	執筆者・タイトル	刊 行
2017/11	山口由等「坊っちゃん列車」と小林信近 『えひめ近代史研究』(71)	愛媛近代史文庫
2018/10	「広がれ！ふるさと松山の心」 『ふるさと松山学 語り継ぎたいふるさと松山百話』	松山市教育委員会
2018/12	片上雅仁『サムライ起業家 小林信近』	創風社出版
2019/3	山口由等「坊っちゃん列車生みの親・小林信近～その事業 と鉄道文化～」 『文化愛媛』	(公財)愛媛県文化振興財団
2019/3	「日本初の軽便鉄道を松山に走らせた 先覚者・小林信近」 『空から日本を見てみよう 松山・忽那諸島』	DeAGOSTINI

③ 広報

年月日	見 出 し	掲 載 紙
2018/2/21	「松山眠れる偉人発掘～会議所 経済発展に貢献再評価～」	読売新聞
2018/9/22, 23	「伊予経済の先駆者～小林信近没後100年～(上)(下)」	愛媛新聞
2019/1～2	「えひめの創作紙芝居 森盲天外」	愛媛新聞

出典：松山商工会議所「眠れる偉人を未来につなぐ研究会」資料より作成。